令和八年度

得意型

# 国語問題

〔注意事項〕

一、試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。

二、問題は二十二ページに渡っており、一・二で構成されている。
ページの抜けや印刷不備があった場合には、直ちに試験監督の先生に申し出ること。

三、解答はすべて解答用紙に記入し、**受験番号・氏名**をもれなく、正確に記入すること。

四、問題冊子の表紙にも、**受験番号・氏名**を必ず記入すること。

| 受験番号 |
| --- |
| |

| 氏名 |
| --- |
| |

◎文中からそのまま抜き出して答える場合、句読点や記号は一字とすること。また、ふりがなのある漢字は、ふりがなをつけなくてもかまいません。

## 一

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

ミーレドレ　ミ　ミ　ミ

レ　レ　レ　ミ　ソ　ソ

正門を出ると、聞いたことのあるメロディーが風に乗って流れてきた。音のするほうに視線を伸ばすと、美音が通う学童保育所から聞こえてくる。

たまにはちょっとのぞいてみようか。どうせ塾には遅れてるんだから、と俊介は小学校の隣にある学童保育所に向かった。朝の登校班は一緒だし、学校にいる美音は時々見かけるけれど、学童でどんなふうに過ごしているかは知らなかった。

正面玄関からは入らずに、建物の周りを(あ)[A]囲む庭のようなスペースを、ピアニカの音をたどるようにして歩いていった。庭から部屋の中をのぞきたかったが、クスノキの枝が邪魔をして、思うように見えない。(い)樹木の枝葉の濃い影が、長く足元に伸びている。

あ、ここだな。ピアニカの音がひときわ大きく聞こえる窓ガラスの前で、俊介は立ち止まった。ラッキーなことに、ここには(う)樹もウわっていなくて、するすると窓に近づくことができる。そろりと窓を開けると、思った通り、ピアニカを前にカエル座りする小さな子どもたちが[B]並んでいた。

前列の左端にいる美音のことは、一瞬で見つけた。髪を二つくくりにして、(注1)飴細工のようなツルツルとした赤い髪飾りを付けている。吹き口をくわえて必死に指を動かす姿は、家で練習している時の何倍も必死だ。

ドードーソーソーラーラーソ

ファーファーミーミーレーレードー

頬を膨らました美音の目は、鍵盤ではなく指揮をする先生の手をずっと見ていた。(注2)ブラインドタッチでパソコンキーを打つように、美音はほぼ前を向いたまま鍵盤を叩いている。楽譜は暗記しているのか、他の子どもたちのように譜面にちらちら目をやることもない。なんだ美音、先生のことガン見じゃんか。まばたきくらいしろよ。必死すぎだっての。①俊介はにやにやしながら美音の横顔を見ていたが、すぐに、それしか方法がないのだと気づく。ピアニカの音色が聴こえない美音は、ああやって指揮を頼りに鍵盤を叩くしかないのだ。美音がこの演奏に参加するには、楽譜をすべて丸暗記し、下を見ずに鍵盤を叩く以外方法がない。みんなと同じように演奏をしているが、その努力はみんなと同じではない。美音はいつだって誰よりも努力している。

――美音は耳が聴こえないの。

お母さんにそう聞かされた時から、俊介にとって妹は②特別な存在になった。それまでずっと弟が欲しかったし、生まれたのが女の子だと知ってふてくされたりもした。けれど、そんなことどうでもよくなった。妹を大切にしようと思った。妹を守れる、強い兄ちゃんになろうと決めた。

窓をそっと閉め、俊介はまた庭を戻っていく。クスノキの影はさっきよりも薄く、そのぶん空の色もずいぶん淡くなっていた。ピアニカの練習はまだ続いていて、メリーさんのひつじときらきら星が交互に聞こえてくる。美音はいまも眉根を［C］、指揮をする先生の手を見つめ続けているのだろう。

〈中　略〉

学校から走って家まで戻り、ランドセルの前ポケットから鍵を取り出した。今日もお母さんは仕事で、七時前まで帰ってこない。

洗面所まで行くのが面倒で、台所の水道で手を洗ってから冷蔵庫をのぞいた。お母さんが作っておいてくれた弁当を取り

出して、レンジに入れる。朝早くに作るので、レンジで二分間チンするようにと言われている。

「はあ……」

温めが終了する二分間だけと決め、俊介はダイニングに置いてある椅子に腰を下ろした。背もたれに体重をあずけて両目を閉じると、日射しの下で全力疾走した疲れがいっきに出てくる。

「塾、行きたくないな……」

え 弱音を口に出してしまうと、呪文のように体がどっと重くなり、椅子から動く気力がなくなってしまった。加熱が終了したことを伝える電子音が、自分ひとりしかいないダイニングに繰り返し響き渡り、早く塾に行けと急かしてくる。

〈中　略〉

気がつくとテーブルの上に突っ伏していた。毎晩十二時過ぎまで起きているので、お ユダンするとすぐに眠ってしまう。気力を［D］重いまぶたを開き、時計を見ると、六時になろうとしていた。電子レンジがまだ律儀に鳴り続けている。

「塾……行かなきゃ」

頭が重かったが、そう言い聞かせて立ち上がった。もうすっかり冷めたプラスチック製の弁当箱をレンジから出した時に、焼肉のタレで炒めた肉の匂いが鼻先をかすめ、折れそうだった心に少しだけ力が戻る。弁当と水筒、今日使うテキストとペンケースを詰め込むと、俊介は腕と背中に力を込めてリュックを背負った。

電車が新宿駅に着いた時、外の景色は夕暮れ色にか ソまっていた。仕事帰りらしい大人たちとすれ違いながら、俊介は重い足取りでき カイサツを抜ける。

いま頃B組では二限目の理科が終わり、三限目の国語の漢字テストが始まっているだろう。こんな中途半端な時間に顔を出したら、漢字テストを避けるために遅刻したと思われるかもしれない。やっぱり今日はこのまま休んでしまおうか、と雑踏

の中でふと足を止めた時だった。

「俊介」

人混みの中から自分を呼ぶ声が聞こえた。驚いて、行き交う人の中で立ち止まると、

「俊介、なにしてるんだ」

後ろから声がして、振り向くと加地先生が立っていた。いま一番会いたくない人に見つかってしまったことにみぞおちがきゅっと痛む。

「なんだ、どうした」

「ちょっと遅れてしま……って」

先生と目を合わせたとたん、ここまで必死に堪えていたものが③いっきに溢れ出そうになった。顔を見られるのが嫌で、慌てて下を向く。

「俊介、飯食ったか？」

加地先生が俊介の腕をそっとつかみ、優しい声で聞いてきた。人の波から俊介を庇うように、すぐそばに立つ。俊介が顔を伏せたまま首を横に振ると、「おれいま空き時間なんだ。一緒に食いに行くか」と先生が背中を軽く押してきた。その力に素直に従う。

Pアカデミーの建物がある大通りから、一筋奥に入り込んだところにある小さなビルの前で、先生が立ち止まった。「ここでいいか？」と擦りガラスの嵌まった古いドアを押し、慣れた様子で店の中に入っていく。(注3)スツールが五脚並ぶ(注4)カウンター席と、四人掛けのテーブル席が二つあるだけの狭い店内には、加地先生と俊介以外に客はいなかった。

「いらっしゃい、今日もハムサンドとホットコーヒーでいいの？」

テーブル席に座ると、腰の曲がったおばあさんがテーブルまで水を持ってきてくれた。

「うん、おれはそれで。俊介は……あ、おばさん、この子うちの生徒なんだけど、ここで弁当食っていいかな。悪いんだけど」

④「ああいいよ。気にせずお食べ」

(注5)鷹揚に頷くと、おばあさんがカウンターの奥に向かって「ホットとハムサンド一つ」としゃがれ声で叫ぶ。

「古い店だけど、居心地はなかなかいいんだ」

ゆっくりとした足取りで立ち去ろうとしていたおばあさんが、くるりと振り返り、

「加地くん、古いは余計だよ」

とコントのような間合いで言い返す。

「弁当、先に食っていいぞ。腹減っただろ」

「うん……」

床に置いたリュックから弁当を取り出すと、俊介はテーブルの上にそっと載せた。お母さんが朝早くに起きて作ってくれた弁当だったので、どこかで食べないと、と思っていたのだ。

「いただきます」

ムネの前で手を合わせてから蓋を開けると、俊介の大好きな豚肉の野菜巻きがぎっしりと詰められていた。にんじんといんげんを豚肉で巻いて、甘辛い焼肉のタレをからめて炒めたものだ。

「お、うまそうだな。お母さんが作ってくれたのか」

「うん」

「いつも思うけど、お母さんっていうのは偉大な存在だな。こうして子どものために手間暇かけて弁当を作ってくれて。あたりまえじゃないぞ、感謝しろよ、俊介」

「……うん」

冷めても美味しいものを、とお母さんは毎日メニューを工夫してくれる。俊介の好きな肉料理は必ず一品入れてくれるし、お弁当を食べる休憩時間が十五分しかないので、食べやすいようにとご飯はおにぎりにしてある。

「俊介、今日はどうした？」

弁当を食べ終えると、加地先生が聞いてきた。この店に来た時から遅刻の原因を聞かれることはわかっていたが、なにをどう話せばいいかがわからず、俊介はしばらく口をつぐんだまま黙っていた。

「疲れたのか」

加地先生が口元に笑みを浮かべた。その笑顔に、頭の中で考えていたいくつもの言い訳が、ぱっとどこかに消えてしまう。

「わかんない。学校の先生にも、疲れて見えるって言われたけど」

体力的にはまだいける。でも気力が萎えている。

「俊介はサッカーやってたんだよな。何年間やってたんだ？」

運ばれてきたハムサンドを食べながら先生が質問を重ねてきた。一口が大きくて、もうすでに半分を食べ終えている。

「五歳の時に始めたから……七年間」

「ふごいな。七年間もシャッカーやってはのか」

口の中をいっぱいにしながら喋るので、なにを言っているのかわからない。我慢できずに笑ってしまった。先生も笑い返しながら、五分もかけずにハムサンドを食べ切ってしまった。

「だからだな。おまえは本当に根性があるよ。どうだ俊介、東駒は遠いか？」⑤

「……うん、遠い」

「あんな難しい学校、他にないな」

「うん……他にない」

東駒以外は受験するつもりはなく、落ちたら地元の公立中学校に行く。入塾の時に加地先生にはそう伝えたとお母さんが言っていた。東駒しか受けないなんて、現実をなにもわかっていない入塾前だから言えたことだ。サッカーを始めた五歳の時に「日本代表に入る」(注6)と豪語していたのと同じ。でも加地先生から志望校についてなにか言われたことは、一度もなかった。

「なんで東駒なんだ？」
「……将来ロボットを作りたいからです」
「それだけが目的なら、他にもいろいろな学校があるだろ。中高一貫の優秀な国公立の中学が、都内にはたくさんある。東駒にそこまでこだわる理由はなんなんだ？」
そこまでこだわる理由、と言われ、俊介は下を向いた。自分の手をじっと見つめ、右手の中指に貼ってある絆創膏に触れる。
「ペンダコが痛そうだから」とお母さんが昨日の夜に巻いてくれた絆創膏……。右手の親指でペンダコをなぞりながら、俊介は再び黙る。
でもいまのこの気持ちを誰かに話さないと、心が破裂しそうだった。俊介はゆっくりと顔を上げ、口元にきゅっと力を入れる。
「生き方を変えたいからです」
長い沈黙の後、俊介がようやくそう答えると、加地先生は両目を大きく見開いた。口をすぼませ、⑥ふいのパンチを食らったような表情で俊介を見返してくる。
「なんだ俊介、おまえ、えらく大人びたことを言うな」
「ほんとのことです」
加地先生がコーヒーのおかわりを頼むと、一緒にプラスチックのコップに入ったオレンジジュースが運ばれてきた。おばあさんが「あたしからのサービスだよ」と俊介の前に置いてくれる。
「おまえは、いまの自分が嫌なのか？」
⑦困ったような顔をして加地先生が聞いてくる。加地先生がこんな顔をするのは珍しい。
「はい、おれは……自分が嫌いです」
加地先生が真剣に聞いてきたので、自分も真剣に答えた。誤魔化すことも流すこともできたけれど、それはしなかった。

「そうか……。理由を聞いてもいいか」

しばらく考えた後、俊介は頷いた。⑧急に足が震えてきたので、両手で両膝を強くつかんだまま、加地先生の顔を見る。

「おれ、妹がいるんです。いま一年生で、同じ小学校に通ってるんだけど、生まれつき耳が聴こえないんです。先生は……先天性風疹症候群って知ってますか？」

コップに浮かぶ氷がぶつかり、カランという小さな音を立てた。オレンジジュースは美音も大好きだ。ファミレスのドリンクバーでも、オレンジジュースばかり飲んでいる。

「いや、知らないな」

「赤ちゃんの病気です。妊婦さんが風疹に罹ったら、そういう病気の赤ちゃんが生まれてくることがあって……。心疾患とか白内障とか……難聴とかが、代表的な症状で……」

俊介の体に赤い発疹が出ているのに気づいたのは、幼稚園の担任の先生だった。

――俊ちゃん、ここ痒くない？　ほら、小さな赤い点々があるでしょう。

先生は俊介の両袖をまくり上げ、首を傾げた。そしてそのまま園内の医務室に俊介を連れていき、他の先生にも、皮膚に散らばる赤い点々を見せた。発疹を見た先生たちは俊介の上着を脱がせて腹や背中も確認し、体温を測った。その日俊介は教室には戻してもらえず、迎えに来てくれたお父さんと一緒にいつも通っている小児科医院を受診した。お医者さんは俊介の首に触れ、耳の下に触れ、「風疹ですね。間違いないでしょう」と頷いた。風疹の症状に特徴的なリンパ節の腫脹がありますね、と。

「おれが四歳の時に風疹に罹って、それをお母さんに……」

うつしたんです、と言おうとして喉が詰まった。それ以上言葉が続かず、そのうちに声を出す力がなくなった。

「俊介が風疹に罹って、それを妊婦だったお母さんにうつした。そういうことか？　その話は誰から聞いたんだ、お父さんかお母さんがおまえに話したのか？」

俊介は俯いたまま、大きく首を横に振る。お父さんとお母さんが話したわけじゃない。

「おまえがこのことを、妹さんの耳が聴こえない原因を知ってるってことを、ご両親はご存知なのか？」

俊介はもう一度首を左右に振る。お父さんとお母さんはいまも、俊介がなにも知らないと思っている。だから自分もなにも知らないふりを続けている。話す勇気もない。

偶然、聞いてしまったのだ。

四年前の夏の日、家族で征ちゃんのおじいちゃんの牧場に遊びに行った時に大人たちが話をしているのを、耳にしてしまった。

――わかったわ。征にも厳しく言い聞かせとく。でも……美音ちゃんの難聴の原因が、幼稚園で流行った風疹だったってこと、誰が広めたのかしらね。幼稚園で風疹が流行ることなんてよくあることなのに……。誰も悪くないのに、本当に酷い噂話をする人がいるわね。

プール遊びをしていて、全身から水滴を滴らせ、俊介は居間の縁側に上半身を乗り出していた。お母さん、水鉄砲取って。そう叫ぼうとしたら、征ちゃんのお母さんの言葉が、聞こえてきた。言っていることの意味はよくわからなかったのに、自分にとってとても怖ろしい話だということはわかった。「誰も悪くないのに」の「誰も」は、自分のことなのだと、なぜか直感で気づいた。「俊ちゃんは悪くないのに」と、おばさんは言いたかったのだ。

テーブルの隅に視線を落としたまま黙りこくっていると、

「おまえが入塾テストを受けた時、担当していたのはおれだったんだ。憶えてるか？」

と加地先生が聞いてきた。下を向いたまま、俊介は頷く。

「入塾テストの結果を、おれからおまえのお母さんに説明したんだ。何点だったかな？　点数ははっきりと憶えてないけど、あんまり良くはなかったな。それでお母さんもえらく恐縮ⓒしてて、これじゃあ入塾は無理ですね、って帰ろうとしてたんだ」

その話はお母さんから聞いた気がする。でも帰ろうとしたことは、知らなかった。

「おれはおまえを合格にした。合格点には達してなかったけど、そんなことは正直なところさほど関係ない。成績が伸びるか

どうかは、その時点の学力よりもむしろ、子どもの性質を重要視するところがあるんだ。それでおれは、おまえなら絶対に伸びると思った。こういう仕事をしていると、時々巡り合うんだ。黙っているのに顔から、全身から、負けん気が立ちのぼっているような子に出逢う。おまえはそんなやつだった。そういう子どもには必ず、⑨金の角が生えてくる。だからおれはおまえに、勉強を教えてみたいと思った」

知らない間に頬を伝っていた涙を手の甲で拭ってから、俊介はゆっくりと顔を上げる。

「先生はいつも……金の角って言うよね」

加地先生がそんなふうに見てくれていたなんて、全然知らなかった。人より遅れて塾に入った自分には、角も生えないだろうと諦めていたのだ。

「おれが合格だと伝えたら、お母さんすごく驚いてな。涙浮かべて、おまえのことを頑張り屋なんだって言ってたよ」

涙ぐむお母さんの顔が、俊介の頭の中にすぐに浮かぶ。お母さんは、俊介や美音が褒められるとすごく喜ぶ。自分が褒められているような、とても嬉しそうな顔をする。

「お母さんの言葉は嘘じゃなかったよ。四月に入塾してからこの半年間、おまえは本当によく頑張ってる。おまえの急成長は、Pアカ新宿校の講師陣の間でも話題になってるくらいだ。でも今日、おまえがどうしてこんなに頑張れるのかがわかったよ」

先生はいったん口をつぐみ、静かに息を吐き出した。

「俊介おまえ、しんどい人生だな」

先生の言葉を聞いたとたん、涙がまた溢れてきた。抑えようとして、でもどうやっても泣き声が漏れ出てしまう。先生の言ったとおりだった。これまでずっとしんどかった。でもしんどいなんてことを口にしたらいけないと思っていた。自分が弱音を口にするなんて許されないと、怯えていた。先天性風疹症候群という病気を初めて知った時。幼稚園での記憶が、その病気と結びついた時。そこからほんとに……しんどくてたまらなかった。だから頑張るしかなかったのだ。必死に頑張って、美音を守れる強い兄ちゃんになって、それだけが自分のできる精一杯だと思って生きてきた。でもサッカーがだめになって、

もうどうすればこれ以上頑張れるのかわからなくなった時に、東駒のことを倫太郎から聞いた。日本で一番難しい中学校に挑んで、もし合格したなら、自分を許せるかもしれないと思ったのだ。

「なあ俊介、その年でそんな大きなものを背負うなよ。……おまえの気持ちが、おれにはわかるよ。先生にも守らなきゃならない家族がいる。でもおまえはその年で、そんな大きなものを背負う必要はない」

先生の手がテーブルの向こう側から伸びてきて、俊介の頭をそっとつかむ。

「俊介は賢い。努力もできる。ただ東駒は最難関だ。あと半年でおまえの学力が東駒レベルまで上がるかどうか、正直なところおれにもわからない。でもこの受験がおまえを少しでも楽にしてくれるなら、おれも全力で教える。応援するんじゃなくて一緒に挑戦する」

俊介はテーブルの上に置いてあったおしぼりを手に取って、両目に強く押し当てた。それからおしぼりで頬を拭い、鼻水を拭い、口元を拭ってから前を向いた。目を開くと、いままで涙で歪んでいた先生の顔がはっきり見えた。

「先生は……中学受験をすることに意味があると思いますか？」

みんなに、ここまで過酷な受験勉強をさせることに納得できないの。

だって六年生の夏休みは、人生で一度きりしかないんだから。

中学受験なんてなんの意味もないって言ってたぞ。

金と時間を使って塾に通っても、合格しなかったらどうせ広綾中に行くんだ。

勉強を頑張りたいなら、中学に入ってからでも遅くないって。

頭の中にこびりついて離れなくなっていた豊田先生や智也のお父さんの言葉を、俊介はもう一度口の中で唱えてみた。俊介のムネを刺す、小さな棘がびっしりと付着した言葉。

「もちろんだ。じゃないと、中学受験の塾講師なんてやらないだろう？　おれは、中学受験には意味があると思ってる。人は挑むことで自分を変えることができるんだ。十二歳でそんな気持ちになれる中学受験に、意味がないわけがない」

先生はそう言って微笑(ほほえ)むと、そろそろ塾に戻るぞと立ち上がった。

（藤岡陽子(ふじおかようこ)『金の角持つ子どもたち』）

（注1）飴(あめ)細工…あめを用いて形を作り出すこと
（注2）ブラインドタッチ…手もとを見ずにキーボードを用いて入力する技術
（注3）スツール…背もたれのないイス
（注4）カウンター…客が飲食する細長いつくえ
（注5）鷹揚(おうよう)…小さなことにこだわらずゆったりしているようす
（注6）豪語(ごう)…大きなことを自信たっぷりに言うこと

問一　═══線㋐～㋒のカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで答えなさい。

問二　〰〰線ⓐ「律儀(ぎ)に」・ⓑ「雑踏(とう)」・ⓒ「恐縮(きょう)」はどういう意味ですか。最も適当なものをそれぞれ後の中から選び、記号で答えなさい。

ⓐ律儀に
ア　ふんいきをこわして
イ　大きな声で元気よく
ウ　こわれたようすもなく
エ　きまりや約束を守って

ⓑ雑踏
ア　足音高く歩きまわるようす
イ　さまざまに思いなやむようす
ウ　多くの人で混みあっているようす
エ　いろいろな年ごろの人がいるようす

ⓒ恐縮

ア　悲しくて泣きそうになること
イ　予想どおりでがっかりすること
ウ　身もちぢむほど申し訳なく思うこと
エ　おどろいて動けなくなってしまうこと

問三　A・B に入ることばとして最も適当なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。同じ記号を使ってはいけません。

ア　そろりと　　イ　すらりと　　ウ　ぐるりと　　エ　ずらりと　　オ　もぞもぞと　　カ　ぴったりと

問四　C・D に入ることばとして最も適当なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。同じ記号を使ってはいけません。

ア　寄せて　　イ　下げて　　ウ　失って　　エ　残して　　オ　満たして　　カ　振りしぼって

問五　――線①「俊介はにやにやしながら美音の横顔を見ていた」とありますが、このとき俊介はどのような気持ちでしたか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　がんばっている妹を見て兄としてうれしく思う気持ち
イ　家にいる時とはちがう妹の態度を不思議に思う気持ち
ウ　自分が見ていることに気づかない妹をからかう気持ち
エ　自分との約束を守ってがんばる妹をじまんしたい気持ち

問六　――線②「特別な存在になった」とありますが、どのような「存在」になったのですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　不幸で将来が不安になる存在
イ　自分だけが理解してやれる存在
ウ　ほしかった弟よりも大事な存在
エ　大切に守らなければならない存在

問七　――線③「いっきに溢(あふ)れ出そうになった」のはどうしてですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　信頼(らい)する先生なら、つらい気持ちをしっかり受け止めてくるだろうと感じたから。
イ　心のうちを誰(だれ)にも言わずに過ごしてきたが、いかりの限界を超(こ)えてしまったから。
ウ　下校してからずっと一人でいたので、話し相手が見つかってうれしくなったから。
エ　言いたくて仕方のなかったことについて、先生がタイミング良く聞いてくれたから。

問八　――線④「ああいいよ。気にせずお食べ」とありますが、おばあさんの俊介への同じような気持ちがここ以外で読み取れるところを本文中からひと続きの二文でさがし、その初めの七字を抜き出して答えなさい。

問九　――線⑤「遠い」とありますが、ここではどのような意味で言っていますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　通うには距離がある
イ　合格することが難しい
ウ　自分とは無関係である
エ　楽しさが感じられない

問十　――線⑥「ふいのパンチを食らったような」とありますが、どのような様子を表していますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　長い沈黙の後の急な答えで心の準備ができていないようす
イ　予想もしていなかったことばを聞いておどろいているようす
ウ　相手が自分を好いていないことがわかって落胆しているようす
エ　いきなり相手が攻撃をしかけてきて恐ろしく感じているようす

問十一　――線⑦「困ったような顔をして」とありますが、どうしてですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　俊介の心情をはかりかねているから
イ　俊介が急に大人に見えてしまったから
ウ　俊介が自分のペースで話し始めたから
エ　俊介の答えがどんどん脇道へそれていくから

問十二　――線⑧「急に足が震えてきた」とありますが、どうしてですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　今まで話して来なかった自分の秘密に関することを、加地先生に伝えようと決心したから。
イ　これから話そうとする内容は最も重要なことなので、ここでは言いたくないと思ったから。
ウ　遅刻をしているのに加地先生にやさしくされ、話まで聞いてもらえることがうれしかったから。
エ　人前で話すのが苦手な俊介にとって、加地先生やおばあさんの前でうまく話せるか不安だったから。

問十三　――線⑨「金の角が生えてくる」とありますが、どのようなことですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　勝ち気な性格を発揮して誰よりも目立つようになるということ
イ　常識ではとても考えられない奇跡を起こすようになるということ
ウ　他の人にはできない特技を身につけられるようになるということ
エ　目標に向かって努力ができて力もついてくるようになるということ

問十四　――線⑩「そんな大きなもの」とありますが、俊介が守らなくてはならないと思う原因となった「大きなもの」とは何ですか。「～こと」に続く形で二十字以内で説明しなさい。

問十五　――線⑪「先生は……中学受験をすることに意味があると思いますか？」とありますが、「先生」の考えを本文中から五十字前後で抜き出し、初めと終わりの五字を答えなさい。

## 二

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

漫画や映像と違って、小説は文字だけで物語を綴ります。絵も音声も映像もなく、読み手は文字を追いながら、自分の脳内のスクリーンに物語を映していきます。

脳内で物語を立ち上げていく力が、想像力なのです。

こう書くと、とても大変な作業に思えるかもしれません。

でも、あなただって日記やＳＮＳの文章を書くとき、脳内でその日のことを映像的に再現しているはずです。

小説の場合は、それがあなたの話ではなく、登場人物の話であるというだけのことです。

〈中　略〉

小説には登場人物の言葉に加えて感情も書かれていますから、読者は感情移入(注1)しやすく、スリルや A 怒哀 B を登場人物と一緒に体感します。

さらに面白いのは、脳内に映し出されるイメージが、①読者の数だけあることです。

絵や映像があると、顔や姿はもうわかっているわけですから②想像力に制限がかかります。

でも小説なら、「屈強な男」とか「可憐な女」という表現をもとに、あとは読者が自由に想像するので、脳内に描かれる像は C 人 C 色ですよね。

その自由さが、また楽しい。小学生時代、友達何人かと同じ本を読んで感想を言い合うと、みんな違うイメージを持っていたのに気づいてびっくりしたこともありました。

小説に書かれた文字を辿る、それを続けるだけで、あなたの想像力は鍛えられ、感性が豊かになり、思考が柔軟になって

いきます。

そして、豊かな想像力は、目の前の現実から未来をイメージしたり、実際に起きているのとは別の選択についても考えたりする力を与えてくれます。

あるいは、こんなことがあればいいな、と思い立って、じゃあ、どうすれば実現できるだろう、と考えるときにも役に立ちます。

何より、想像力は他人を知るための③大きな武器となるのです。

現代人は、どんどん想像力を失っていると言われています。欲しいものが何でも手に入るだけでなく、スマホを使って簡単に得られる画像や文字情報によって、知らないこともすぐに調べがつくからです。

本来、情報収集や他人を知ることは④能動的なものですが、現代では、欲すればたちまち手に入る受動的なものとなりました。(注2)知見を豊かにしたい、誰かのことを知りたいと思ったとき、自ら積極的に情報収集をした場合と、第三者から情報を提供される場合とでは、吸収度が違います。

能動的な情報収集は、本質やホンネ、真実を知るための⑤鍵になる要素です。

ですから、私が誰かを取材する場合は、まずその人について書かれた文字情報をしっかりと読み、ある程度イメージを膨らませた上で、画像や映像を見るようにしています。

すると、相乗効果が生まれ、より深く相手を把握できるのです。

文字情報を追っていても想像力が足りなければ、把握がうまくいかず、本質やホンネを見落としてしまいます。

だからこそ想像力が大事なのですが、これは勉強で身につくものではありません。日頃の想像する習慣が物を言います。

そこで、楽しみながら想像力を養うために、小説を読もうというわけです。

小説を読むと、たいていは⑥登場人物の誰かに感情移入することになります。こうしてますます小説の世界にのめり込む。それこそが、読書の醍醐味(注3)です。

この面白さにはまると、大袈裟ではなく、テーマパークのアトラクションより楽しい経験ができます。

小説の登場人物に感情移入して読み進めるというのは、その人物の人生を生きることに等しい。無論、フィクション(注4)の世界での話ですが、読んでいる間は、あなたと登場人物は一心 D 体です。

小説の舞台がニューヨークであれば、あなたもニューヨークで暮らしている。明治維新の小説なら、激動の時代を体験することになるでしょう。切ない恋愛小説なら、どうやって相手に告白しようかとドキドキするでしょうし、すれ違いを歯がゆくも感じるでしょう。

こうして登場人物になりきっている間、実生活では絶対にわからない他人の人生を、自分ごととして感じ取っているはずです。

これは、すごく貴重な体験です。

当たり前ですが、あなたの人生は一つしかなく、やり直しはきかない。しかも、大半は自分で選べない環境で生きています。

1 長い人生では、たくさん後悔するでしょうし、失敗もするでしょう。

でも、いろんな経験を積んでいたら、そういう失敗を回避できるかもしれません。

小説なら、2 夢中になって読んでいても、登場人物に降りかかる出来事は自分の人生ではないので、失敗しても傷つくことはありません。

と同時に、一緒に体験したわけですから、経験は我が物となっています。

自分の人生は後戻りできませんが、小説なら、あのときこうすれば良かったと振り返ることができます。

未来は誰にも予想がつかず、「絶対」なんてありえないと頭では理解しても、日々の暮らしでそのことを考える余裕に恵まれない。ですが、小説を読んでいるときは少し余裕があるはずです。このままだと、あの登場人物と同じことが起きそう、と予測できる場合だってあるでしょう。

人生は一度きりです。でも、小説を読めば読むほど、多くの人生を疑似体験(注5)することになりますから、たくさんの人生を味わえます。

それもまた、小説の魅力なのです。

極めていけば、人生経験の豊かな大人より、人生について理解が深くなるかもしれません。

（真山仁『〝正しい〟を疑え！』）

（注1）感情移入…自分が相手と同じ気持ちになること
（注2）知見…物事を見聞きして得た知識や情報
（注3）醍醐味…ほんとうの面白さ
（注4）フィクション…想像によって作り出された物語
（注5）疑似体験…実際には体験していないが、現実に起こるような体験をすること

問一　A・B にそれぞれ漢字一字を入れて四字熟語を完成させなさい。

問二　二つの C に同じ漢字一字を入れて四字熟語を完成させなさい。

問三　D に漢字一字を入れて四字熟語を完成させなさい。

問四　1 ・ 2 に入ることばとして最も適当なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。同じ記号を使ってはいけません。

ア　もしも　　イ　たとえ　　ウ　おそらく　　エ　あるいは　　オ　たとえば

問五　――線①「読者の数だけある」とありますが、どのようなことですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　一つの小説から導き出されるイメージがひじょうにたくさんあるということ
イ　それぞれの小説の持つイメージの数が読者の人数によって異なるということ
ウ　小説のイメージが作者の意図したものとは違う形に変化していくということ
エ　イメージが広がるすぐれた小説が読者の数をさらに増やしていくということ

問六　――線②「想像力」とありますが、ここではどのような「力」ですか。本文中から十五字以内で抜き出して答えなさい。

問七　――線③「大きな武器」とありますが、ここではどのようなことを「大きな武器」と言っていますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　必要な条件　　イ　本質の理解　　ウ　面白い方法　　エ　有力な手段

問八　――線④「能動的」とありますが、ここでほぼ同じ意味で用いられている言葉を本文中から三字で抜き出して答えなさい。

問九　――線⑤「鍵（かぎ）」とありますが、ここではどのようなことを「鍵」と言っていますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　映像の再現　　イ　むずかしい作業　　ウ　重要な手がかり　　エ　秘密の楽しみ

問十　――線⑥「登場人物の誰かに感情移入すること」とありますが、ここでほぼ同じ意味で用いられていることばを本文中から十三字で抜き出して答えなさい。

問十一　次の中から本文の内容に合うものとして最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア　勉強や読書をするよりも、毎日の生活の中で想像する習慣を身につけることのほうが重要だ。

イ　充分（じゅう）な想像力があれば、さまざまな選択肢（たくし）や可能性について思いをはせることができるものだ。

ウ　自分から進んで情報を得る場合と他人からの情報を受け取る場合とでは、情報量に大きな差が出る。

エ　ひとつの表現から読者がいろいろな想像をすることは、小説のおもしろさであると同時に欠点でもある。